

次号予告

特集 脳卒中

脳卒中の手術と残存機能……………	帝京大学・脳外科	嶋 中 坦
日本語の失語症……………	横浜国立大・都老人研	笹 沼 澄 子
失認・失行症を伴う患者の作業療法……………	中伊豆リハセンター	前 田 守
上肢に対する治療……………	ボバース記念病院	紀 伊 克 昌
上肢の治療(作業療法の視点より)……………	金沢大学・医療短大部	松 田 勇
高齢化社会に向けて……………	国立療養所東京病院	黒 川 幸 雄

とびら 講座

3. 肢体不自由児における母子関係

……………北九州市立総合療育センター 久 田 信 行

老人

9. 高齢者の就労形態……………元都社協 下斗米 傑

プロGRESS 医療技術短大 PT・OT 学科の実情と展望

……………金沢大学・医療短大部 奈 良 勲

リハビリテーション・インフォメーション

日本義肢装具技術者協会……………大阪厚生年金病院 鋤 園 栄 一

日本義肢協会……………日本義肢協会 小 林 秀 男

あんてな PT・OT 養成校新設予定校の沿革, 概説 ……東京都養育院 松 村 秩

資料 第17回理学療法士・作業療法士

国家試験模範解答(Ⅳ)(1982年度)

編集後記

一般臨床医学において「診断」という作業は重要な位置を占めている。この「診断」を中心にして種々の医療が行われるのである。リハビリテーション医療においては、「診断」を下された患者の心身の機能に焦点を定め、それらの評価(evaluation, assessment)を行い、解決、改善すべき諸問題を把握しようとする。一方、諸問題(negative sign)だけではなく、患者に潜在しているであろう可能性(positive sign)を探る行為も同時に必要といえる。

日本理学療法士協会では全国研修会の中で「評価」という課題とここ数年継続的に取組んできた。その過程の中で、テスト、測定イコール「評価」ではないという考え方が明らかにされてきたといえる。そして、スピードはゆるやかではあるが、「評価学」としての学問的体系化への志向もすでに始動しているといえる。

今月号では、古川氏に「身障における評価の考え方」、関、平尾氏に「精神科にお

ける作業療法評価の考え方」について述べていただいた。身障における評価は精神科における評価に比べると評価基準がより明確であるといえるが、精神科においては対象が複雑であり、評価に対する理論的構築が大変困難のようである。しかし、医療行為を行っている以上、この課題から逃避することはできないので、関係者の一層の英才を働かせていただきたい。

コミュニケーション障害を持つ患者のテストにおいて、データ収集の困難性とデータの信頼性が問題になる。このことから、患者のコミュニケーション能力の把握について、我々は関心を持つ必要があろう。熊倉氏の論文がその一助になればとおもう。今川氏には中枢神経疾患の把握にとって重要となる立ち直り・平衡反応テスト、嶋田氏には協会の評価委員会が作成した上肢ROMの試案を紹介していただいた。

(奈良 勲)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
埼玉県障害者リハビリセンター所長

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎リハビリ学院院長
(五十音順, 以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
リハビリテーションペ
イン(痛み)クリニッ
クわらび診療所

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
都心身障害者センター

富 岡 紹 子
加納岩総合病院

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

安 達 克 己
池 田 俊 雄

伊 東 元
宇都宮 初 夫

大 丸 幸 翼
金 子

鎌 倉 矩 子
紀 伊 克 昌

木 村 信 子
駒 沢 治 夫

藤 田 智 馨
嶋 田 明 子

鈴 木 昌 家
関 橋 正 明

高 橋 正 明
中 屋 久 隆

橋 元 隆
藤 沢 しげ子

矢 谷 令 子
山 下 隆 昭

(担当 細田・西塚)